

要旨

【背景】 遺伝性乳がん卵巣がん症候群(Hereditary Breast and Ovarian Cancer Syndrome; HBOC)は遺伝性腫瘍の中でも高い割合で乳がんや卵巣がんを発症することが知られている。HBOC はがんリスクを下げることを目的とするリスク低減手術が選択肢として認められている。しかし日本ではリスク低減手術を含む包括的な医療を提供できる施設が限られているため、HBOC の女性がどのような困難と向き合い、どのような過程でリスク低減手術を選択しているかは、これまでほとんど知られてこなかった。

【目的】 HBOC と診断されリスク低減手術を選択するに至った女性が、どのような体験をしているかを明らかにし、HBOC の女性に必要な看護を見出す一助とすることを目的とする。

【方法】 リスク低減手術を選択した HBOC の女性 5 名にインタビュー調査を行い、質的記述的方法を用いて分析した。

【結果】 リスク低減手術を選択した HBOC の女性は、1. 家系員の乳がんもしくは卵巣がんを体験する、2. 母親や家系員のがんに影響を受ける、3. 年齢の近い友人のがんを体験する、4. 乳がんと診断されることを予測し納得する、5. 自分の病気が周囲の人に与える影響を気にする、6. 自分が乳がんになった原因を知りたいと思う、7. 治療中に多くの人と関わり、支えられ、影響を受ける、8. 病気になったことで新たに得たものや気づけたことがあることを実感する、9. 遺伝学的検査の結果を不安と期待が入り混じる気持ちで待つ、10. 病的変異という結果を受け入れつつも子への影響を不安に思う、11. 遺伝という課題を家族と共有する、12. 異常のない臓器を摘出することと、がんのリスク低減との狭間で葛藤する、13. リスク低減手術に臨み、心身の変化を体験する、14. リスク低減手術後の身体の変化に折り合いをつける、15. 自分の治療選択や健康管理に能動的に取り組む、16. 複数のきっかけで自分は遺伝性のがんかもしれないと気付いていく、という体験をしていた。リスク低減手術を選択した 5 名の女性は、いずれも母親やそれ以外の家系員の乳がんもしくは卵巣がんを体験していた。またリスク低減手術を選択する過程では、それぞれが葛藤を感じていた。HBOC の女性はリスク低減手術に葛藤を感じながらも、がんになるリスクを少しでも減らすことを優先し、手術を決断していた。

【考察】 本研究の結果から、母親や家系員といった血縁者のがんは、がんの検診行動や受療行動、リスク低減手術の選択に影響を与える可能性が見いだされた。また「がんになるリスクを少しでも減らしたい」という強い思いが、リスク低減手術に対する葛藤を低下させる要因のひとつであることが示唆された。

【結論】 HBOC の女性は過去の家系員のがん体験に影響を受けながら、がんと遺伝のふたつの難題に同時に向き合っている。HBOC の女性を支援するためには、すべての看護師ががんと遺伝の基礎的な知識を持つことが必要である。また HBOC の女性に対する看護を考えるうえで、意思決定支援の知識と技術は重要な要素になる。